

## II バラエティーを考えるということは、大変なのだ

### 1. バラエティーって何だ？

バラエティーを定義するのは、案外むずかしい。

辞書には「落語・漫才・曲芸・歌舞など諸種の演芸をとりませた演芸会。また、その種の放送番組」（「広辞苑」第6版）とあるが、いまどきこの例にあるような演芸だけで成り立っているバラエティー番組など、かえって珍しい。ちなみに、英語の「variety」は、変化、多様性、変わり種の意味である。

雑学やクイズや占いであれ、健康ものや紀行ものやスポーツものであれ、情報番組や歌番組や時事討論番組であれ、そこにタレントや芸人が出てくれれば、現在では、もうそれだけで立派にバラエティーである。いや、タレントらがいる、いないに関わりなく、ネタの選択や演出の仕方ひとつで、バラエティーっぽくなる。

つまり、バラエティーは出演者によっても、構成や演出の仕方によっても定義される番組スタイルということである。これは相當に幅広く、奥も深い。

\*

最近、日本放送作家協会編『テレビ作家たちの50年』（NHK出版、2009年8月刊）という本が出版された。刊行の旗振り役を務めた同協会の市川森一理事長は、放送倫理検証委員会の委員でもあるから、身内のよしみ、以下、しばらく勝手に使わせてもらうことにする。というのも、バラエティー番組の内幕や盛衰を、各時代の制作者や放送作家がコンパクトに、網羅的に、かつ面白おかしく語っている資料は、じつは他にあまりないからである。

サクセスストーリー、失敗談、ドタバタ、てんやわんや、楽屋話、制作秘話。こうした現場のナマの話を下敷きにして、バラエティーについてここで語られていることを無理やりまとめると、

(1) バラエティーはテレビ放送の最初からあった。

(2) ドラマや報道のような標準形式のないバラエティーは、「何でもあり」のバイタリティーあふれた、猥雑な世界だった。

(3) それだけに、1分で終わるようなネタでも、制作者も放送作家もタレントもいっしょになって、半日どころか2日も3日もかけ、放送直前まで脂汗をかきながら考え、無我夢中で作った。

(4) かと思うと、制作者が場を設定し、あとはタレントや芸人のアドリブとセンスだけで進行するバラエティーが現われ、さらに時代が下ると、ライブ感を強調するENG (Electronic News Gathering。ビデオ機材によって機動性を高めた取材・制作

の手法) や高度化した編集機材を駆使したバラエティーが登場するなど、次々に手法や構成の冒険も繰り返された。

(5) 話題にもならずに討ち死にした番組も掃いて捨てるほどあったが、斬新なバラエティーは出現 자체が「事件」となり、日本中の話題をさらった。

(6) 制作関係者がネタを考え、新しい才能を発見し、新形式と新ジャンルを開拓し、創造と破壊を繰り返してきた経験とエネルギーが、バラエティーをテレビならではの表現スタイルの中核に押し上げた。

(7) かくしてバラエティーの手法は、報道番組や情報番組も含めたあらゆるジャンルと混じり合い、テレビに欠かせない重要な表現方法となって、今日に至っている。

……というようなことである。

となると、いまやどれがバラエティ一番組で、どれがそうでないかを区分けすることはほとんど不可能であるばかりでなく、意味もないという等しい。実際、何を制作するにせよ、面白く、わかりやすくと腐心する制作者の実感もそういうものかもしれない。したがってこの意見書でも「バラエティー」「バラエティ一番組」「バラエティー的表現」等々と、ごちゃ混ぜに使うことにする。別段、他意はないので、それぞれの仕事や役柄に応じ、放送関係者それがどうか我が事として読み取っていただければ幸いである。

この本は多くの放送作家や番組制作関係者等が書いたり語ったりしたものだから、バラエティーばかりではなく、ドラマのこともたくさん載っている。報道についての記述も少々ある。

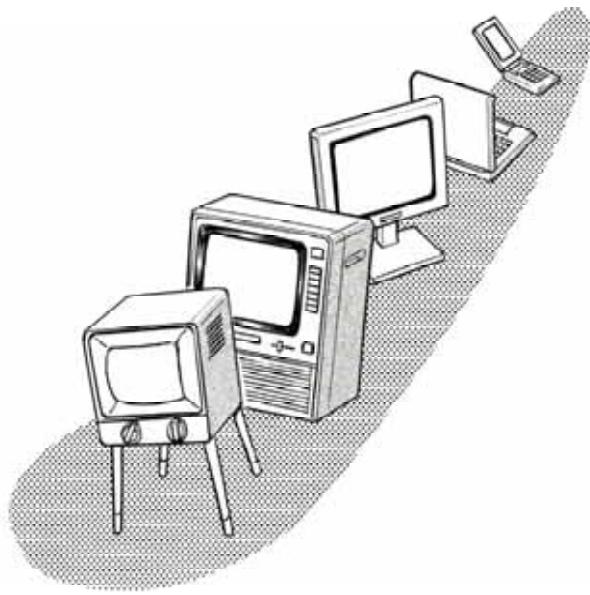
しかし、言及されている番組名や出演者の名前を見て、懐かしく、ありありと思いつくのは、やはりバラエティ一番組の数々である。当時の自分や家族や友人のこと、時代や世の中の様子、そのとき見てきた画面の形や色までよみがえってくる。

バラエティーってエラい、と私たちもあらためて思う。

## 2. バラエティーと世の中との関係

テレビは、ひとつの産業として多くの仕事を作り、たくさんの制作者や放送作家や出演者を輩出してきたが、それとは桁違いの規模で視聴者を作ってきたメディアである。

テレビは「いまこれが大事な問題だ」と言い、「いまこれが面白い」と教え、その意味ばかりか、取り上げたテーマ、事実、材料の面白がり方や批判の仕方まで、映像



と音声と文字を駆使して、わかりやすく解き明かしてみせる。視聴者はテレビを見て、「ああ、そうなのか」と納得したり、「それは、ちがう」と反発したりする。家族や友人らと話題にし、また面白がったり、けなしたりする。

賛同であれ、反対であれ、テレビが伝えたことを軸にして、あちらでもこちらでも人間同士が言葉を交わし、それらが波紋となって広がり、全体がゆるやかにつながっていく。テレビには人々の関心事を作り出し、さまざまに共有させ、共振させることを通じて世の中のまとまりを醸成するパワーがある。他のマスメディアにも同じ力があるとしても、影響力の大きさではとてもテレビにかなわない。

そして、そのテレビの中核的な番組スタイルこそ、バラエティーだった。

\*

バラエティーには笑いがあり、驚きがあり、発見があり、怒りや悲しみもある。これらは、人の身体と情動と暮らしのいちばん近いところで作用する力である。

まっすぐに響くオシャレな会話とジョーク、ギャグとコント、ボケとツッコミ、口調と間合い、台詞と仕種、話題とキャラクター等々は画面から人々の日常に流れ込み、視聴者の知識の量と質を変え、感じ方、考え方を変えてきた。それはそのまま一人ひとりの「常識」や「秩序」、「社会通念」や「権威」に対する態度を変え、家族や友人、地域や社会とのコミュニケーションの仕方と関係のあり方をえることにもつながった。こうしてバラエティーは、人と時代と世の中を動かしてきた。

言い換ればこれは、バラエティーこそ、古い秩序や権威を笑い飛ばし、いま世の中を窮屈にしている常識や社会通念を搖さぶって、人々に新しい現実を見せ、新しい感受性に目覚めさせてきたということである。

もしかしたらいま、40年前、20年前、いや、数年前のバラエティーを見ても、人々は笑ったり、驚いたりしないかもしれない。いくつかの例外はあるにしても、どうして当時、この番組が面白かったのか、たぶん私たち自身も思い出せない。若い人们には見当もつかないだろう。しかし、そのこと自体が、私たちが変わり、時代が変わり、世の中が変わったことを示している。

日本でテレビ放送が開始されたのが1953（昭和28）年。それから56年、振り返ってみれば、テレビが、とくにバラエティーが人々の共通の関心事を作り出し、人と時代と世の中をじわじわ変えながら、その全体の求心力となってきた歴史は、じつは戦後に始まった民主主義の進展プロセスとも重なっている。

民主主義はときにはじれったく、退屈に感じられる制度だが、節目節目に国政や自治体の選挙によってはもちろんのこと、住民・市民・NPO等の活動によって、またライフスタイルや流行や文化によっても更新されることによって、面白く、活気あるものに変わってきた。こうした退屈さや面白さを感受する情動そのものが、多分にバラエティーによって育てられ、そのときどきのバラエティーの趣向や嗜好に大きく左右されてきたことを考え併せれば、バラエティーと民主主義は二人三脚、お互いの親和性は高いと言わなければならない。

へエ～ッ、そななんだア、などと、若い制作者のあなた、驚かないでいただきたい。  
そななんだから。

### 3. バラエティーは腕白坊主か？

ところが、である。

民間放送には「民放連放送基準」というものがあるが、この手引書にバラエティーのことがどう書かれているかを見てみると、独立した項目としては——何もない！

報道や教育・教養といったジャンルには独立項目が立てられ、縷々記されているのに、ことバラエティーについては、ひとつもない。

ただし、この「放送基準」の各論に相当するところに、「公衆道徳を尊重し、社会常識に反する言動に共感を起こさせたり、模倣の気持ちを起こさせたりするような取り扱いはしない」「不快な感じを与えるような下品、卑わいな表現は避ける」「出演者の言葉・動作・姿勢・衣装によって、卑わいな感じを与えないように注意する」などと、バラエティー番組を想定したらしい記述がある。

参考までに、日本放送協会（NHK）の場合も見ておこう。「日本放送協会番組基準」には「芸能番組」「娯楽番組」という項目があって、バラエティーに關係ありそうな事項として、「すぐれた芸能を取り上げ、情操を豊かにするようにつとめる」「放送の特性を生かした新しい芸術分野を開拓する」「家庭を明るくし、生活内容を豊かにするような健全な娯楽を提供する」等とある。

NHKのように、バラエティーを芸能番組や娯楽番組に括っても間違いではないし、民放連のように、ときどき脱線するバラエティー的表現が視聴者の鬱憤を買うことがないように、と心配する気持ちもわからないではない。

しかし、バラエティーがテレビならではのスタイルとジャンルを作り出し、いまやその手法がニュースや情報番組の制作・表現方法にまで浸透しているというのに、しかも、多様な意見やものの見方を行き交わせることで成り立つ民主主義との親和性も高いというのに、この扱いはちょっと可哀相ではないだろうか。

NHKの「番組基準」は、バラエティーを当たり障りなく「娯楽」「芸能」という枠内に押し込めているように見えるし、民放連の「放送基準」ときたひには、「あれをやっちゃいけない」「これに注意しなさい」ばっかりで、バラエティー制作者たちを励ますところが全然ない。まるで手を焼く腕白坊主の首根っこを押さえつけていたみたいである。

\*

もっとも、バラエティー番組の制作者たちも、しばしば悪太郎ぶりを發揮し、そこで開き直ることもないわけではなかった。

それどころか、けっこう頻繁にワルぶってみせるところもあったようである。

先の本にも、業界屈指のプロデューサーが放送作家たちに、面白いギャグやコントを書いてきたら、「ウチの局はケチで金を払わないから俺が自腹で1本100万円払う！」と叫んだという逸話（もらった人はいなかつたらしい）や、良識ある新聞に自分たちのバラエティーの批判記事が出ると、大喜びして、「この番組は当たります！」と断言したというエピソード（ホントに、大当たりした）などが載っている。

大ヒットしたバラエティー番組、先ほど、

私たちが懐かしく思い出したと言った数々のバラエティー番組も、そのいくつかは、

「子供の教育上、いかがなものか」と、当時の世の親たちの眉をひそめさせ、「公序良俗に反する」としてやり玉に挙げられたものだった。そこには「社会通念」や「秩序」を笑い飛ばし、「権威」や「権力」をおちよくって、ときにはブチ壊すパワーがあった。

まさに変化、多様性、変わり種。当たり前のようにあった現実をひねったり、ゆがめたり、こねくりまわして、ちがう現実を作り出してしまうパワー。何もありとは、そういうことである。



違法、非合法のことは論外としても、あとは常識と非常識、秩序と混沌、嘘と真実、美と醜、本物と偽物、既知と未知、その他とその他のすれすれのところで、バラエティーの制作者たちは知恵と悪知恵を絞り、七転八倒、悪戦苦闘し、顰蹙を買ったり、まぶしく見上げられたりしながら番組を作ってきた。

ゴマンといった制作者や作家のなかには、誰かの「つまんねえよ」のひと言で「発狂した奴、行方不明になった奴、荷物をまとめて田舎へさっさと帰った奴、物陰から石を投げつけた奴」など、種々雑多な人たちがいた。

それだけみんな、ひたむきに「真面目だった」とし、その仕事は「面白くも辛い、楽しくも切ない、馬鹿々々しくも充実し」たものだった。そうやって制作されたバラエティーに、私たちは反応し、ファンになってきたのではなかったか。

カタいことを言えば、表現の自由も表現の冒険も、こうした涙ぐましい努力、危なつかしい奮闘によって、押し開かれ、人々を惹きつけ、少しずつ当たり前になり、定着してきたものである。

#### 4. バラエティーは危機なのだ！

だが、しかし。

これだけガンバッてきたバラエティーだが、先の本の後半、というか最近の話になるにつれ、関係者の口調はだんだん愚痴っぽくなる。その気配が漂い始める。

曰く、バラエティーはあらゆることをやり尽くし、いまや何を見ても、既視感がつきまとう。

曰く、タレントとその予備軍は相変わらず少なくないが、突出したカリスマ的才能、ビッグな芸人が少なくなった。過去に大ヒットして、「お化け番組」と呼ばれたようなバラエティーは、制作者とカリスマ、テレビ局とスポンサーが一体となって作り上げてきたものだったが、いまそういう熱気が見当たらない。

曰く、放送界にコンプライアンスを矮小化した事なき主義、サラリーマン的保身がはびこって、ムチャなこともできなくなったりし、破天荒なカリスマの存在も許されなくなったり。それが、「やっちゃいけないことが面白く」「世の中に衝撃を与える快感」に満ちていたバラエティーを生きにくくさせている。

曰く、不況になるとバラエティーが増えるのはもともとだが、最近は、昔のように手間暇かけて作り込んだバラエティーの出る幕がどんどん減っている。放送作家不要、セット不要、安いギャラ、持ちネタがあって、リハーサル不要の若い芸人やタレントを集め、あとは話のうまい司会者を置きさえすれば一丁上がり、のようなものが多すぎる。

曰く、バラエティーの制作者も、旬の芸人やタレントのキャスティングができるというだけの、要領のいい連中ばかりが跋扈しているんじゃないかな。

……だと。

ほんとに大変なんだ、いまのバラエティーは。

関係者諸賢にも、思い当たるところがあつたりして……。

\*

ここに漂っている閉塞感は、おそらくバラエティーだけの問題ではない。バラエティーが民主主義の進展と二人三脚、人と時代と世の中に寄り添い、動かしてきたことを考えれば、同じことが、いまの人と世の中の側についてもそつくり当てはまる、ということであろう。

経済の先詰まり感、政治の停滞感、行政の不透明感、国際情勢の不安定感、地域の尻すぼみ感、家庭の孤立感……。21世紀最初の10年間、私たち一人ひとりはこうしたさまざまに気を滅入らせる現実に囲まれて暮らしている。それぞれがなぜ起きたのかわからないまま、誰もがこれら幾重にも押し寄せてくる閉塞感を肌身に感じながら生きている。



こうした現実に巻き込まれまいとすれば、気の合う者同士、小さく固まって、せいぜい内輪の話題で盛り上がり、憂さを晴らすことくらいしかやることがない。面白くない出来事、不愉快なノイズ、癪に障る連中のことなんか知ったことか。無視を決め込むか、イジメてやって、せせら笑ってりやいい……とばかりに、あっちでもこっちでも

サディスティックな冷笑的気分が湧き上がり、広がっていく。

この小さくまとまった冷笑的気分というものは、見かけほど冷めていなくて、あつというまに匿名集団化し、少数意見や異物の排除に熱狂することがあったり、マスコミの場合には、ターゲットにした人物や現象を突き放し、吊し上げるような集団的過熱取材や集団的過剰同調番組となって暴走することがある。これもまた、この時代と社会で起きていることである。

そんな世の中で、個々人と、個々の家庭と、個々の職場が差し当たってできることといったら、なるたけムダを省き、世間の非難を浴びることのないようクビを引っ込めていること。それが、昨今流行りの「コスト削減」と「コンプライアンス強化」の縮み志向ということなのかもしれない。

世の中の方がこんな調子では、バラエティーもなかなか大変である。二人三脚はパワーになるときもあるが、ダメなときは両方が互いの足を引っ張り合って、ズッコケる。

それでも、制作者たちはこもごも言っている。

曰く、バラエティーは本来の「何でもあり」の猥雑さを失ってはいけない。

曰く、バラエティーは毒をなくしたらおしまいだ。

曰く、テレビには「こここの場所は、ちょっとアブナイことをやってもいい」という「悪所」が絶対必要なのだ、と。もちろんその悪所とは、バラエティーのことである。

心意気やよし。

しかし、何を、どうやるのか？

\*

ふ一つ。

以上、ところどころで先の本から引用しているが、これはほんのサワリである。それも筆者や発言者の意図におかまいなく引っ張ってきて、ずらしたり、外したりして、委員会で議論してきたことに重ね合わせている。その辺は、バラエティーの得意技の見よう見真似、どうかご海容くださいますよう。

興味と関心のある方は、ぜひ現物に当たっていただきたい。

さて。

そろそろ、「あれ」である。

「あれ」の話です。

では、CMです。

ハイ、BPOの。

## 5. 視聴者意見と委員会

BPOには電話やファックス、手紙や電子メールで、視聴者からの意見や苦情がたくさん寄せられる。キー局の番組についてのものもあれば、ローカル局の番組のものもある。視聴者対応の専門スタッフは1日中、電話に張りつき、根気強くメモを取っている。

傍で見ているだけでも大変な仕事だが、これこそ委員会の活動の基盤である。ここで収集される情報がなければ、視聴者が個々の番組について、また放送局や放送界の現況についてどう思っているか、具体的なところがわからない。

もちろん各放送局にも、視聴者意見は寄せられている。それらに基づいて、あるいは局独自の判断で、内容の変更や訂正を行った番組もある。委員会へも、その主要なものに関しては、報告の形で送付されてくる。

私たちは委員会のたび、こうしたさまざまに集められる視聴者意見に目を通し、必要に応じて番組DVDを見ながら検討することにしている。場合によっては、当該局に問い合わせることもあるし、審議や審理のテーマにすることもある（視聴者意見の

主なものについては、BPOのホームページ (<http://www.bpo.gr.jp/>) や、定期的に発行している『BPO報告』を参考にしていただきたい)。

\*

委員会発足以来、さまざまな議論をかさねるなかで、私たちが気にかけてきたことのひとつに、いわゆる「バラエティー問題」があった。

「出演者の誰々が、こんな非常識なことをしゃべって（やって）いた」「この番組でこういう映像を流していたが、不適切ではないか」「この時間帯に、こんな内容を放送をしていいのか」等々と寄せられる視聴者意見に、バラエティーに関するものが少なくなかったからである。

出演者にとってはジョークや冗談、その場のはずみでしゃべったり、罪のないおふざけのつもりでやったことかもしれない。あるいは制作者は、「バラエティーは報道番組ではないのだから、事実や出来事を多少誇張したり、ゆがめたりすることも許されるはず。正確さより面白さが命だ」と思って作ったかもしれない。

しかし、視聴者は必ずしもそう受け取っていない。冗談やジョークやユーモアが「度の過ぎた悪ふざけ」や「イジメ」に感じられ、面白さを目指したはずが、「下品」や「でっち上げ」に受け取られるということが起きる。それも、かなり頻繁に起きている。

とりわけ委員会が残念に思うのは、視聴者からの指摘によって、訂正やお詫びや釈明をせざるを得なくなったバラエティ一番組が実際にいくつもある、という事実である。

\*

ここからが、いよいよ「あれ」の、具体的な話になる。

第1に、いま世の中で、バラエティーのどういうところが嫌われているか、ということを見ていくことにしたい。そのために、この1年ほどのあいだにBPOに寄せられた視聴者意見や各放送局から送られてきた報告事例等を5つに分類し、手短にまとめてみる。

第2に、そこから浮かび上がってくる現在の視聴者像について考えたい。視聴者の価値観の多様化ということは従前から何度も指摘されてきたが、ここではそれをもう少し具体的に見ておくことにする。

そして、これらを踏まえて、「これ」の話に移る。

それが第3で、放送局と制作者がこの多様化した世の中に向けて番組を、とくにバラエティ一番組を送り出すとき、どういうことを心がけて仕事をしていただきたいか、委員会の考えを述べてみたい。冒頭でも言ったように、テレビは視聴者とのあいだにあらたな、堂々とした公共空間を作り出してほしい。ここで述べることは、そういう私たちの期待である。

さア、イッてみようつ。